

になりました。

昭和六十三年に、長女が「弥栄会友好訪中追悼の旅」に参加し、十二日間にわたり引揚げ逃避行の途をたどり、亡くなった方々の慰霊を営むことができたことは、以前からの私の心からの願いでもあったので、これで肩の荷がおりた思いでした。しかし、満州の地には今だに大勢の人が眠っており、戦争の犠牲となり残留している人も多く、まだまだ戦争は終わっていないのです。

私の生涯は、青春時代も無く、異国で苦勞の末、敗戦、避難、引揚げ、そして新天地北海道開拓と、苦しみ連続だったように思います。しかし、いろいろな体験を味わい歩んできたことの結果として、現在の幸福な生活があるのだと感じる今日このごろです。

満州引揚げ労苦の思い出

北海道 柰 ステ

はじめに

敗戦から五十数年もたった今になって、満州から引き揚げてきたときの労苦を書いてほしいというお話がありました。命からがら避難した悲惨な体験は、正直なところ思い出したく無い気持ちが強かったので。しかし、お話を聞いているうちに、あの戦争がいかに無意味であって、その結果がいかに残酷なものであったかを、次の世代の人たちに書き残し、語り継いでいく必要があるという言葉に、私たちには、その役目と責任があるのだと思いました。そうしてようやく、粗末な文章でもよいから書いてみよう、決心をしました。

一 生い立ちと渡満の動機

私は、大正六（一九一七）年三月一日に、新潟県中

頸城郡保倉村（現在は上越市）の佐藤家の四女として、兄二人、姉三人の六番目の子供に生まれました。

長じて高等小学校を卒業したあと一年ばかり裁縫学校に通いました。末っ子なので、どんな仕事をしてもよかったです。結局は家の仕事だった農業を手伝うことになりました。

昭和十五（一九四〇）年、二十三歳の春に大叔父（祖父の弟）から縁談が持ち込まれました。相手は隣の和田村の人で、大叔父は「今は満州開拓団で在満中だが、百姓に熱心な男だから一緒にしても後悔はないと思うがどうかねえ？」と言って勧めました。写真を渡されましたが、これが見合いのようなものでした。学校の先生をしていた大叔父の話を無理に断るのも心苦しくて、思案をした末に結婚を承諾しました。

満州とはどんなところなのか、全く知識は持っていませんでしたが、ただ「赤い夕陽に照らされて……」の歌詞と、広い広い大陸であるということぐらいは知っていました。当時の若い女性は、満州のことをほとんど知らなかったのが実情でした。

主人は、明治四十三（一九一〇）年三月五日に、和田村の篤農家として、村内でも敬われていた農家の二男として生まれました。「杵」という珍しい姓は、現在の上越市郊外にある、あの歴史的にも有名な春日山に上杉謙信公が築城をしたときに、先祖が木工の総元締めを務めた功により、上杉公から杵という姓を賜り、それ以後、杵を名乗るようになった由緒ある家柄だと聞かされました。高等小学校卒業後は、父の手助けをして農業をしていましたが、昭和十年ごろになり満州開拓という話を耳にするようになり、自分もどうせ一生を農業で過ごすならば、広い広い大地で自分の力を試して、精いっぱい働いてみたいという気持ちを抑えることができなくなったそうです。

新潟県と聞けば一般的に、越後平野の平坦な水田地帯を思い浮かべますが、頸城郡は山地が多くて、二、三男の分家などは考えられない貧乏農家がほとんどでした。二男の身では、自作農など夢のまた夢だと前から諦めていた主人は、満州開拓の話聞くにつけ、勇氣百倍、これこそ働きがいのある仕事と、開拓に飛び

込む決心をしたそうです。ようやく念願がかなって、昭和十四年六月、新潟県から送り出された第八次阿倫河開拓団の一員として、同志と共に勇躍渡満したのです。

ところで私の方は、結婚を承諾したのに、相手は満州からなかなか帰ってきませんでした。八月になって、ようやく一時帰国をして、身内だけのささやかな結婚式を挙げました。そして、慌ただしく昭和十五年八月十五日、新潟港を出港して朝鮮の清津港に上陸、そこから北満に向かっての汽車の旅を開始して三日目の夕方、やっと小さな駅に降りました。駅には、団本部のトラックが迎えに来てくれましたが、「開拓地は駅からかなり奥地に入るので、少し我慢して下さい」と言われて、心細い気持ちになりました。トラックの中から過ぎていく周りの景色を眺めていましたが、レンガ造りの建物がさっぱり目に入って来ないので不思議に思っ、運転している江村さんに聞きましたが、ただ笑うだけで答えてくれません。主人と初対面のときに、「満州は良い所だ。住宅はみんなレンガ造りだ

よ」と話してくれたことが頭の中に残っていたので、どこまで行ってもレンガ造りの建物が見当たらず、とうとう主人にも問うてみましたが、やはり笑っているばかりでした。

ようやく着いたところが主人たちの部落で、満州式の土壁で造られた共同宿舎でしたが、私の期待していたレンガ造りの建物ではありませんでした。宿舎の中に入ったとたんに、土間の片隅に設けられているかまどの上の平釜のふたから「ウワン！」という音がして、黒山になっていたハエが一斉に飛び散りました。この様子を見て、「これはとんでもない所に来ちゃった。主人にすっかりだまされて連れて来られた」と、悔しくて情けなくて、自然と涙が出てきました。既に生活をしている先住の方たちの片隅に、取りあえずカーテンで仕切った部屋を作り、しばらくここで新婚生活を過ごすことになりましたが、何とも心細い異国での暮らしでした。

二 阿倫河開拓団での生活

私が、阿倫河開拓団に着いてから約一年は、弥彦部

落で皆さんと一緒にあって、畑作業に精を出してしました。ここでの一年は、あつという間に過ぎてしまし、どんな出来事があったのか振り返ってみても、ほとんど記憶に残っておりません。

一年ほどたったころ、団本部からの指令により、主人は水田班の耕種担当に配置換えになり、弥彦部落を離れることになりました。阿倫河地区は、米作りの北限といわれる地帯で、大面積の水田耕作を日本の稲作のように田植方式ではなく、種もみの直まきという方法で米作りをしていましたから、大変でした。代掻しろがきのときは、幼い子を背負いながら牛の手綱を取るということで、死ぬ思いの作業でした。田んぼの泥の中で足が上がらずに、泥田から抜けなくて倒れてしまい、全身泥まみれになることもあり、大変に苦労しました。

種まきが終わると、すぐにナベツルの大群が種もみを食べに来るので、一晚中一斗缶をたたいて脅かし追ひ払うのですが、本当に疲れしました。発芽して根付くまで続く作業でした。秋になると、また稲刈りが終わ

るまで、再びナベツルの追ひ払い作戦が始まるので、苦勞の連続の水田耕作の作業でした。

昭和十八年には、鶏舎から出火し、住宅にも燃え移って全焼するという事故がありました。わずかの家具類は持ち出しましたが、衣類は持ち出すことができずに、着の身着のままの状態となりました。出火の原因は、使用人であった朝鮮人が火のついたタバコをほい捨てして、それが鶏小屋の敷わらに燃え移ったのです。鶏は五十羽ほど飼っていて、卵は団本部が買い取っていましたが、この火事で全部焼死してしまいました。水路が近かったので、駆け付けた部落の人たちが、バケツリレーで消火活動をしたのですが、我が家と横尾さんの家が焼け出されました。それからは隣の桑野さんの家之間借りをして、一年ほどお世話になりました。焼けた家の屋根をふき替え、内部を造作して住めるようにしました。満州の在来家屋の壁は、トーパーツ（日干しレンガ）なので消滅することではなく、屋根と内部造作ができれば住めるようになるのです。そのうちに、開拓団全体の共同生活から個人経営の

形態に変わりましたが、いつそのようになったのか確かな記憶はありませんが、私は子供の世話と、ジャガイモや野菜を作ること、毎日楽しく過ごしていました。

日本内地の農村ではとても考えられないのは、無肥料で大豆、麦、玉蜀黍などが採れることです。家畜は、牛と馬を飼育していました。一晚のうちに、狼に豚や羊が襲われて全部殺られてしまうような恐ろしいこともあり、小家畜はほとんど飼えませんでした。また、主人は縄ない機を求めて、原野の湿地帯に自生している、俗に羊草と呼ぶ草を刈り取り、乾かして縄を作り、本部に納入しました。無限の資源を有効に活用する主人の考え方は、立派でした。稲わらは収穫がばら刈りのため、家畜の飼料に利用するより方法がなく、日本のように縄をなうことはできませんでした。

現地の満人との付き合いは、いたって良かったと思います。私たちは水田耕作をしていたので米があり、正月には餅をついて、彼らを招待したり届けたりしましたが、大喜びでした。彼らの正月行事で、餃子をお

祝いに持って来てくれるほど、良好な交流関係でした。

三 終戦前後から引き揚げるまで

昭和二十年の春ごろから、戦局のひっ迫により、阿倫河開拓団でも団員が次々と召集されました。残っている男性は数少なくなり、開拓の農作業は女、子供と年寄りばかりでするようになり、思うようにはかどらなくなってきました。七月になると更に召集者が多くなり、主人にもそのうちにぎつと召集令状が来るのではないかと心配になりました。

八月に入ると、いわゆる「ねこそぎ動員」で、開拓団には男子がほとんどいない状態になり、心配していた主人にもついに召集令状がきて、八月十五日に入隊するようになりました。それでもこの時点では、まだ日本が戦争に負けるとは考えてもいませんでした。

「主人が出征した後の仕事はどうすればよいだろうか……」と、考えれば考えるほど不安になってきました。同じ部落で、残された者だけで力を合わせて、雇っている満人を使って作業を進めるしか方法はない

と話し合いました。

主人と一緒に、三人の団員が皆に見送られて入隊しました。主人は、出発する前に「今まで雇っていた満人に話をして、面倒を見てくれるように頼んだから心配するな！」と言って家を出ましたが、男性がいないこの開拓団で、これから先何年こんな生活を続けなければならぬのかと考えると、不安がいつぱいで眠れない夜が続きました。

主人が出征してから何日もたたないうちに、「日本は戦争に負けた！」という話を団本部から知らされました。皆が集まって今後のことを話し合いましたが、私たちの部落では男は一人もいないので、女と子供だけでは話まともならず、結論らしきものは何もできませんでした。とにかく出征した主人たちはどうしているのか、まだ齊々^{チチ}ハル^{ハル}辺りにいるのなら、すぐにでも帰ってくるのではないか、それとも戦争に負けたのだから捕虜になって殺されてしまうのか、そんなことを考えていると余計に心配になってきました。様子がさっぱり分からないのですから当然です。私たちだっ

てこれからどうなるのか、負けたのだから女、子供も捕虜にされるのか、身に危険は及ばないのかなど、心細い限りでした。団本部や県公署からの指示を受けてから、更に話し合うことになり、しばらく様子を見ることにしました。

間もなくすると、満人があちらこちらの家に押し入り、家具、家財などを略奪しはじめたという話が伝わってきました。団本部や、学校などの公共施設や建物が破壊されたり、倉庫などに保管していた食糧や生活必需品などを、押し掛けた満人たちが全部奪って行ったということも聞きました。私たちのところにも、いずれは略奪の手がのびるであろうことを、覚悟しなければなりませんでした。戦争が終わって兵隊は要らないはずだから、主人を早く帰してもらいたいと、毎日毎日「今日こそは！」と主人の帰りを待ちました。春の種まき、夏の暑い真っ盛りでの除草、秋には、収穫するだけになっている稲作や、大豆などの作物は、自分たちの所有にはなるだろうと思いつながら、果たして収穫作業ができるのかどうか心配でし

た。

そのうちに、ソ連軍が進駐してきました。武装解除をするという名目での進駐でしたが、私たちが目にしたのは暴行、略奪行為でした。金日の物はもとより、腕時計、万年筆などを手当たり次第に奪って行きました。同時に、収穫期を迎えた田畑の作物は踏みつぶされてしまいました。人の心の中を、土足で踏みにじられたような思いでいっぱいでした。

それから、半月近くたった九月の初めごろに、待ちに待っていた主人が帰って来ました。話によると、「齊々哈爾に着いたら日本が戦争に負けたと知らされた。すぐに帰れると思ったが、齊々哈爾の市街地警備の任務を与えられたものの、開拓団のこと、家族のことなどを考えると心配で、皆と相談して逃げ帰ることを決心した。一週間ぐらい勤務した後、集団脱走した。見付ければ射殺されることを覚悟して、危険を冒しながら三日間歩き続けて、ようやく甘南の街にたどり着いた」とのことでした。在留邦人は南に向かつて避難を開始し、早い人たちは汽車で出発したという情

報も伝わってきました。

主人が戻ってから、他の団員も次々と帰って来ましたが、大方八月になって召集され、齊々哈爾周辺の部隊に入隊した人たちでその人数は少なく、早くに召集された人たちは捕虜になって、シベリア方面に連れていかれたというわさが伝わってきました。

幸いにも、私たちは日ごろから親しくしていた満人のところで仕事をさせてもらい、取りあえずは生活をしていくことができるようになりました。主人は、「このまま満州の地で農業を続けるのも、一つの生き方かもしれない」と考えていましたが、ソ連軍が来てからは、到底安全な生活はできないと思い、あきらめることにしました。戦争に負けたのだから、今までの日本人と満人との立場や、境遇は逆転するのが当たり前でした。私たちが春から耕作していた作物は、すべて満人の物となり、私たちは雇われて生活していかねばならなくなりました。今まで面倒をみていた満人は理解を示してくれましたが、意地悪な満人には、事々につらい仕打ちを受けました。

開拓団本部は、すっかり崩壊して団としての管理や統率、それに団員の掌握などは全く機能していませんでした。いつになったら日本に帰れるのか、これから先はどうなるのか、見通しは全然立ちませんが、生きるためには働かねばなりません。主人と私は、満人の使用人として雇われ、農作業に出て働きました。今までの我が家の土地は全部取り上げられて、耕作した作物は他人の物になってしまったのです。本当に悲しいことでした。もっとも私たちが入植した当時、ここが満人の土地だったことを考えると、今更恨むことは筋違いなのでしょうが、それでもその当時はそこまで考えが及びませんでした。私よりも、主人の方が男としてさぞつらかったことだったろうと思います。

そのうちに、八路軍と満軍の衝突が始まり、銃撃戦による攻防がありました。親身になってかくまってくれた満人のおかげで、幸いにも危険から身を守ることができました。これらの人々から、思わぬ温情をかけていただいた人道的な庇護に、心から感謝しています。私たち日本人が過去において、心ならずも多大な

迷惑を掛けたにもかかわらず、このような人々からの情けは、生涯忘れることはできません。

その反面、怖い体験もありました。主人が泊まりがけで遠くの仕事に出たとき、夜になると粟や玉蜀黍などを持って訪ねて来る満人がいましたが、そんなときが一番恐ろしいことでした。厚意は有り難いことでしたが、それを受けると後で面倒なことが起きることを知っていたので、すぐに辞退しました。心ある人は私たちの立場を理解して、あまり立ち入ったり、恩を着せるような振る舞いはせずに見守って下さるので、気楽でした。とにかく、主人の不在が一番危険で恐ろしいことでした。

阿倫河開拓団は、齊々哈爾より更に北に位置しますので、冬の訪れは早く、九月になれば朝晩は冷え込みが厳しく、凍結することもあります。住むところはなんとかなっているものの、必要な家財、家具は奪われたり、売ったりではほとんど無く、それこそ生きていく最低の生活でした。毎日生きていくための労働で精も根も尽きてしまい、二人の子供の面倒も十分に見てや

れず、戦さに負けた国民の惨めさを、つくづく身にしみて感じました。

これまで団本部で指導を受けた経営や生活も、団の崩壊でどうにもならず、預貯金も皆無となってしまいました。ただ一つの救いだったことは、同じ部落の仲間たちが一緒に行動していたことです。日本人同士、しかも今まで開拓の苦勞を共にしてきた人が、お互い励まし合い助け合っていくことこそ、生きる望みになっていたので。こうして、いつ帰れるか分からぬ、当てのない生活が続いたのでした。

敗戦と共に変化した生活で、寒さ厳しい冬を迎え、年を越しました。日本に帰れる夢も消えたような毎日の暮らしの中で、多くの人々の援助や庇護を受けたことは、今までの境遇にこだわらない人間としての、心の暖かさとおおらかさを感じました。

春になり、春耕の時期を迎えると、主人と私は他の人々と共に水田耕作要員として、昨年まで私たちが耕作していた水田の作業尾に従事しました。やがて、敗戦から一年がたち再び夏の盛りが過ぎて、稲の収穫が

始まるころになって、「日本に帰れるらしい」といううわさが耳に入ってきました。そのうわさは、間もなく現実のものになりました。

四 引揚げ避難の始まり

昭和二十一年の九月半ばに、団本部か日本人会か、その辺りの記憶がはっきりしませんが、いずれにせよ「引揚げが開始されることになったので、甘南市街に集まるように」との連絡が入りました。皆は手を取り合い、抱き合って、嬉し涙を流しました。五十数年がたった今でも、このときの嬉しい気持ちは忘れません。早速、今日まで世話になっていた満人の皆さんに、引揚げの指示が出たことを話して、今までに受けた恩義と、温かい援助に対して心から感謝の意を伝えました。満人の方から「私たちが甘南の街まで送るから」という申し出があり、この厚意に甘えて、当日は一同馬車で送ってもらいました。人それぞれに思いがあり、別れを惜しむ情景があちこちで見られました。長い人生の中のわずか七、八年の短い歳月でも、忘れがたいつながりやと交わりがあり、お互いの別れをつ

らしくしました。

九月十五日ごろだったと記憶していますが、馬車に乗せてもらって思い出多い阿倫河地を後にしました。取りあえずの目的地は甘南市街で、翌日到着してすぐに収容所に入りました。しかし、これから先の行動の目途が立たないのか、一週間も足止めされて、はやる気持ちに水を差された思いで過ごしていました。やつと九月二十三日に、日本に向かって出発しましたが、これからの悲惨で残酷な悲劇の始まりになるとは、夢にも思わなかったことでした。

私たちは、甘南の街から、想像もしなかった道を歩いての避難行を始めました。同じような姿、格好をした避難民の列は、一キロメートルから二キロメートル、延々とつながっていました。恐らく五百人以上の人数だったでしょう。私は荷物を背負い、更に二歳の子供をその上に乗せて歩きました。小さい子供でしたが、長い道中ではとても重く感じていました。心身共にたくたくに疲れましたが、他の人たちから離れないように、遅れないように一生懸命歩きました。主人

は、麻袋に米、高粱を入れて、その上に毛布、衣類などを詰めて背負い、五歳の長男をだましました。ながら歩かせていて、泣き出すときどき背負っている荷物の上に肩車をして、歩き続けました。太陽がざらざらと照りつける炎天下で、汗が滝のように流れまじた。子供たちは、「水が飲みたい」「水がほしい」と泣き出しますが、水どころではありませんでした。大人でもあの暑さでは飲みたくなるのが当然ですが、生水を飲むことは死を覚悟するのと同じぐらい危険なことで、我慢するしかありませんでした。幼い子供には、このことが分かるはずもなく、しかって我慢させるだけでした。避難民の中には病人もいて、戸板に乗せ前後を元気な人が担いで運んでいましたが、その人たちには、本当にご苦労さんと言うしかありませんでした。道なき道を歩きましたが、途中で休むこともできず、自分だけ休めばたちまち置き去りになります。何としても皆について行かねばなりません。どのくらい歩いたでしょうか。そのころになると、時間も距離も頭の中で判断できる状態ではありませんでした。やっ

と着いたところは、大きな河の傍らでした。河には橋が架かっていたのですが、爆破されていて歩いては渡れません。どんな手配をしたのか、船に乗って渡ることができました。向こう岸にも大勢の避難民が集まっていて、再び歩き始めました。皆汗を流しながら黙々と歩くだけでした。千万無量の思いを残して、真っ赤な太陽が西の地平線に沈むころ、ようやくある駅に着きました。今になると駅名は思い出せません。何よりも汽車に乗れるという気持ちで、私たちの目には嬉し涙が光りました。歩いては野宿し、そしてまた歩き、やっとの思いでここにたどり着いたのです。これから南へ向かうのか、または日本を目指して帰国の途につくのか、どうなるのかは皆目見当がつきませんでした。ここから汽車に乗れるということは、引揚げの旅が少しでも前に進んだことになり、皆は声を出して喜び合いました。

ようやく汽車に乗りましたが、それは無蓋車でした。我先に乗り込みぎゅうぎゅう詰めに押し込まれ、幼い子供たちはおびえて泣き叫ぶ有様でした。夕陽が

沈み、辺りが薄暗くなったところにやっと発車しましたが、どこからどこに向かって走り出したのか、全然分かりませんでした。主人は分かっていたようですが、私は日本に帰ってからもこの避難行の苦しさで悲しさは思いたしたくない、忘れたいという気持ちから、当時のことを主人に聞くことはしませんでした。しかし、主人が亡くなった今、聞いておけばよかったのにと後悔しています。すし詰め貨車の中では、狭苦しくて横になることもできませんでしたが、子供たちだけは何とか寝かせました。主人と私は小さな毛布一枚を二人でかぶって、一晩中板敷きの床に座り通しました。大陸の夜風は冷たく、厳しく長い夜を眠られずに過ごしました。周りの人も皆同じで、何とも惨めなことでした。

翌朝、原っぱの真ん中の駅ではない所に列車は止まりました。皆は、我先にと貨車から降りて食事の支度に掛かり、粟や高粱を、なべや飯盒で炊き始めました。主人が背負ってきた食糧から、わずかしかない米をたきました。まきが無いので、枯れ枝や枯れ草を集

めての炊飯でしたが、列車がいつ発車するか分からず、気が気ではありませんでした。長男は「お腹がへった！」と言って泣き出しますが、食器も箸も無く、茶碗代わりに空き缶を、箸には蓬よもぎを折って使い、お菜も無いので塩を振りかけて食べました。子供は米のご飯ですから満足でしたが、私たちは惨めな気持ちで、親子共々生き地獄そのものでした。昔の乞食こじきよりもひどい有様でした。

再び貨車に乗り、ある鉄橋に差し掛かると、貨車の中で死亡した無残な姿の子供を、川に向かって投げ、水葬にしてみました。かわいい我が子を手放して川に投げ入れる母親の姿は、まともに見られませんでした。その母親はその後に放心状態になり、気の毒で声も掛けられませんでした。こうした情景は、鉄橋を通るたびに繰り返されていました。冷たい川に水葬された子供たちは、敗戦による最大の犠牲者で、いまだに異国の地で成仏せずにいるのではないのでしょうか。子供を持つ母親の身になれば、こんなにむごいことはありません。わたしの子供も、いつこのようになるか分

からず、他人ごとではありませんでした。それは引揚げ労苦の中で一番心の痛む悲しいことで、その悲劇を身をもって経験した人は、帰国してからも口を閉ざして、事実を語ることをしなかったのです。幸いにも、我が子は二人とも丈夫でしたが、長男は風邪気味となり、症状が重くならないように祈っていました。医者はいないし、だれも薬一つ持っていませんでしたから、病気は怖いものでした。二日ほどすると元氣を取り戻したので、ほっとしました。

貨車は走り続けましたが、時折大きく揺れるので、子供が振り落とされないように抱き抱えていました。陽が沈むと、無蓋車では肌を突き刺す寒気が身にしみ、生きた心地がありません。暗やみの中でかなり大きな駅に着きました。何という駅か知りませんが、ここで貨車を乗り換えることになり、また混乱が起きました。主人が長男を抱き、大きな荷物を背負い、私は子供を背負って荷物を抱えて、真っ暗な車中に乗り込みました。親子四人、やっと床に毛布を敷いて座りました。今度の貨車は屋根のある貨車で、寒さを防ぐこ

とはできませんでした、明かりが無く窓も無いので、空気がよどんでいました。トイレには苦勞しました。外には出られず貨車の片隅に一斗樽を置き、そこで用を足しましたが、女でも恥ずかしいなどと言っていていられません。家畜と同じでした。

甘南を出発して何日たったか記憶にありませんが、新京（長春）駅に着き、下車しました。「一時難民收容所」に收容されました。そこからすぐに、南の錦州に行く予定でしたが、同行者の中に病人が出たので、約二週間の足止めとなりました。主人たちは、共に苦勞して、ここまで来た同志が赤痢になったからといって、ここに置き去りにはできないと、出発を見合わせたのです。食糧も無い、衣類も無い、飢えと寒さによる疲勞感、日本に帰れなくなるのでは？ という絶望感で半月を過ごした後、亡くなった同志を葬って、ようやく錦州に向かいました。錦州では、また收容所に入り、共同生活となりましたが、食べ物不足、風呂には入れず、体は不潔状態になり、虱が発生し、発育盛りの子供はかわいそうでした。日も早い出発を、

毎日願っていました。

ある日、「二、三日のうちに出發する」という吉報が入り、夢のように嬉しく喜び合いました。早速、なげなしの荷物をまとめてに掛かりましたが、気ばかり焦ってなかなかまとまりませんでした。錦州から再び無蓋貨車に乗せられて、コロ島の港に着き、乗船の順番を待ちましたが、心はもう引揚船の上にあります。この気持ちには、実際に引揚げを体験した人しか分からないと思います。

引揚船は、「摂津丸」という大型船で、船内は広く、揺れの少ない心地よい船で、一瞬のくつろぎを与えてくれそうでした。七年間の満州開拓生活の思い出が、走馬灯のごとくに浮かびました。希望に満ちた日滿同の村造りに、命と夢を懸けた主人にとって、こんな結末は大きなショックで、気の毒なことでした。満州の新天地に骨を埋めるべく、必死になって働き、暮らした歲月、それに現地の人々との協和の気持ちも、報われずに終わってしまった無念さ、これらすべてが、敗戦によって引き起こされた悲惨な結果でした。阿倫

河を離れて一カ月の避難生活を過ごした、昭和二十一年十月末、コロ島から出港する船上で、私は主人と永住する覚悟で暮らした満州に、永遠の別れを告げました。「満州よ！ 阿倫河よ！ さようなら！」と云つて。

五 乗船、そして日本へ

やっと摂津丸に乗船できました。甲板から降りたところに少し広い部屋があつて、そこに家族四人が入りました。久しぶりの畳で座り心地もよく、寝ころんだり足を伸ばしたりして、今までの疲れをいやしました。やっと日本に帰れるとの思いで、心は浮き浮きしていました。子供たちは、お腹が減つたと言つて泣き出しましたが、何も食べさせることができず、かわいそうでした。間もなくして食事が配られ、大竹を切つた容器に高粱の雑炊が盛られ、子供には缶詰の空き缶に入れて食べさせました。普段はまずい高粱の雑炊でも、良く煮込んであつて味付けもよく、おいしく食べました。落ち着いた環境下の食事だったので、余計おいしかったでしょう。あの味は今でも忘れません。

船中での食事は朝夕の二回で、甲板上にある熱い番茶をのんで腹をふくらませています。子供は相変わらず空腹を訴えますが、どうしようもありません。夜もなかなか熟睡できずに睡眠不足でしたが、気持ちは興奮状態で、体が浮いているような有様でした。翌朝、早く甲板が上がって洗面をしましたが、昇る朝日と海風で、とても気持ち爽やかになり、生きていとういう実感をしみじみと感じました。

三日目の朝、はるか遠くに陸地が見えたときには、心が躍りました。だんだんと陸地が近付いてくると、柿の木らしく、赤く色づいた実が見え「ああ、秋なのだなあ、日本に着いたんだなあ」と感じて胸は高鳴り、嬉し涙が自然とあふれてきました。

もうすぐ上陸という矢先に、船内で赤痢らしい病人が出たので、検査の結果が出るまで上陸はできないとの連絡があつて、目の前に港があるのに、日本の土を踏むことができませんでした。皆の気持ちも苛立つてきました。何回か検査があつて、十日も足止めされようやく上陸の許可がありました。岸壁に横付けされ

た船から、皆我先にと下船し、佐世保の土を踏みました。収容所に入る前に、検疫所で頭といわず背中といわず、体中にDDTを散布されて臭っ白になりました。子供たちは、びっくりして泣き叫びました。収容所での食事は米のお粥でしたが、そのおいしかったこと、今でも忘れません。「引揚者の皆様、ご苦労さまでした」と、いたわりの言葉をかけられて、こんなに温かく歓迎されるとは思いませんでした。

収容所で数日を過ごし、引揚げ手続きなどを済ませて、近くの駅から汽車に乗って、郷里に向かいました。客車には窓も腰掛けもあって、楽しく日本の秋の景色を眺めながら直江津に着き、そこから長野行き列車に乗り換えて、脇野田駅で降り、主人の実家まで一、五キロメートルばかりを歩いて、夕方六時ごろにやっと届きました。

実家では、秋の取り入れ最盛期でも忙しそうでしたが、皆で歓迎して下さいました。夕飯は白いご飯と温かい味噌汁で、子供も大喜びでした。避難行ではろくな食事もしていなかったので、地獄で仏のように

十分に食べました。風呂にも久しぶりにゆっくりと入り、何十日ぶりかで布団の上に寝ましたが、たちまち熟睡してしまいました。

主人と私は、すぐに取り入れの手伝いをして、一生懸命に働きました。

六 引揚げ後の生活再建

しばらくは実家の手伝いをしていましたが、やがて主人は、「北海道の開拓に行きたい」と言い出しました。家族は皆心配し、特に義父は「土地をやるから、北海道の開拓に行くのはやめなさい」と言いましたが、主人は「おれにはこんなに狭い土地は向かない」と言って聞き入れず、ついに北海道行きを決意して、新潟県庁に相談に行きました。義母はもうあきらめてしまい、どうしても行くのならと、米、味噌、布団などを用意して荷造りしました。

昭和二十二年七月初めごろ、主人は私たちを残したまま、さっそうと出発しました。第二の人生を新しく踏み出すためには、一日も早く開拓地に入って、基礎作りをしなければならぬという思いだったことで

しょう。私と子供は、兄嫁と一緒に頑張って働き、主人が迎えに来るのを待ちました。

引き揚げてきて驚いたのは、日本国内の食糧事情の悪いことで、農村でも同じで不自由な生活の毎日でした。義母が、来る日も来る日も愚痴をこぼすのが、私の心にも染み込んで、申し訳なく感謝の気持ちでいっぱいでした。義兄の子供四人に私の子供二人が加わって、六人の子供が騒ぐので、家の中は大にぎわいでした。私も一日も早く開拓の手助けに行かなければと、覚悟していました。

昭和二十三年の夏に、主人が迎えにきました。ちょうど一年ぶりでした。義母は、衣類など当座の生活に必要な物を用意して下さいました。満州ですべての物を失った私たちにとっては、有り難いことでした。

三日かけてようやく標茶駅シベチヤに着き、現地の新潟部落の方が馬車で迎えにきて、夕方六時ごろに開拓地にはいりました。男の人たちは、真っ黒になって炭焼き作業に精を出していました。共同宿舎で夕食を頂きましたが、主食は配給制で、ここでも食糧事情は悪く、米

少々にかブやフキなどいろいろな野菜を入れた雑炊で、これが常食だと言われました。

私たちが入植して数日後に、今までの共同生活を解散して個人経営に移行しましたが、個人経営も容易ではなく、満州時代と同じく苦勞をしました。炭焼きをしていたので、木炭二俵を背負って標茶市街まで行き、ジャガイモと交換してもらい、食料の足しにしました。当時はジャガイモも貴重品で、あめ玉より少し大きいものが三斗樽八分目ぐらいと、木炭二俵が交換でした。配給米は欠配遅配で、市街の玄米屋まで行くのも大変でした。主人が俵のわらで作った物を履いて行くのですが、雪道の上は、往きは乾いていて歩けるのですが、帰りはわらが水分を吸って重たくなり、歩きづらくなり、背負っている配給物品が肩に食い込んで、大変に難儀でした。四つんばいになって帰ったこともありました。

いよいよ土地の配分が決まり、荒地の開墾が始まりました。配分を受けた土地は二十町歩でしたが、平坦地が少なく、満州のようにはいきません。笹てがよを手鎌

で刈り、鋤で起こすのですが、笹の根が強くて一鋤一鋤が大変な作業でした。女手では、笹刈りははかどらず、三十坪を刈るのに随分と苦勞しましたが、掘り起こした畑に野菜の種をまき、早く芽が出て野菜が収穫できるのを楽しみに、毎日頑張りました。

入植五年目に十勝沖地震が起きて、大事な炭がまが壊れて、炭焼きが不能になり、そのうえ冷害が加わり、農作物の収穫は皆無で、生活資金を得る術が無くなり、苦しい農家経営でした。

入植十年目のころには、種イモを一町歩作付けして、三百俵も出荷しましたが、一町歩のイモ掘りとその荷造りには、多くの人手と資材が必要ですが、その手当は容易なことではありませんでした。満州での開拓と北海道の緊急開拓事業とは、大きな違いがあったが大変でしたが、主人たちは開拓に意欲を燃やし、あらゆる苦難を克服して成功に向けて努力していました。

開拓初期は人力で、次いで畜力を活用し、そして大型機械の力を借りて広い草地在り造成され、そのうちに

乳牛を飼育し、酪農を始めるようになりました。

今は、世の中の情勢も変わり酪農経営も苦しい時代ですが、満州から引き揚げた子供が跡継ぎをして頑張りつづけております。子供は、引揚船に乗ったときに、食器代わりに支給された大竹を輪切りにしたおわんを、当時の労苦の記念品だと言って大事にしており、ときどき取り出しては眺めております。

主人は、昭和五十三年一月に、六十七歳で生涯を終えました。本当に波乱に満ちた人生だったと思います。が、恐らく後悔はしていないことでしょう。

主人の努力で、私や子供はあの苦難の引揚げを乗り越えて、無事に故国の土を踏むことができたと思っておりますし、今日こうやって北海道で酪農を経営しているのも、主人の努力のおかげだと思っております。